

1965年

アメリカが北ベトナムへの全面爆撃を開始したこの年、中国では毛主席が「党内の資本主義の道を歩む実権派」を批判、十一月に姚文元が上海文匯報に「海瑞免官を評す」



科学者の交流盛んに 一九六五年六月、水科篤郎氏(右三)を団長とする日本化学工学者代表团が訪中した。(左から)浜井専蔵、北脇金治、渡辺伊三郎(一人おいて) 俵田三郎、寺嶋勝太郎の諸氏。水科氏は、その後も、当協会の常任理事として、日中科学技術交流を推進、八八年に逝去されるまで、訪中は十回を数えた

一九六五年六月二十五日 羽田

を発表し「文化大革命」の序幕が切つて落とされた。この年は、文革による交流途絶を予感したかのように、作家の老舎氏を団長とする中国作家代表団の来日、新劇十五劇団合同による訪中公演など、文学、演劇、映画、美術、写真、舞踊、化学、体育などの交流が相次いだ。

六五年の主な交流

◎1月 日本演劇家代表团(久板栄二



中国作家代表团で来日した老舎(左一)、劉白羽(右一)両氏を湯河原の自宅で歓迎する谷崎潤一郎氏(左一、当協会顧問)と松子夫人 谷崎氏は一九二五年に訪中し、郭沫若、田漢、歐陽予倩らと親交を結んだ。新中国への再訪を熱望していたが果たせず、同年七月三十日に逝去した。老舎氏もまた翌六六年、不慮の死を遂げている

一九六五年四月七日

◎2月 郎团长、白土吾夫秘書長、戸板康二、成井市郎、北村和夫、関口潤、阪口美奈子の諸氏)訪中。日本工芸美術家代表团(松田権六团长、加藤土師萌、北川桃雄ら諸氏)訪中。

◎3月 日本美術活動家代表团(松山文雄团长、宮川寅雄副团长、須山計一、吉井忠ら諸氏)訪中。中国作家代表团(团长、老舎、副团长、劉白羽、团员、張光年、杜宣、茹志鵬、黄世明、閔曾瑜の諸氏)来日。

◎4月 バレーボールの大松博文氏一行三名訪中。日本男子ハンドボール選手団(高嶋洵团长ら十七名)訪中。小山富士夫、長谷部楽爾両氏が訪中。文学座、俳優座、劇団民藝、東京芸術座、劇団青年座、劇団仲間、新入会、劇団三期会、泉座、劇団青俳、新劇場、青年芸術劇場、東演、稲の会、人形劇団ブークの十五劇団による訪中公演日本新劇団(团长、滝沢修、副团长、東野英治郎、副团长兼秘書長、杉村春子、副秘書長、金丸千尋、事務局長、片谷大陸ら諸氏)七十二名訪中。同時期に訪中公演日本新劇団顧問団(村山知義团长、白土吾夫、長岡輝子、成井市郎、阿部廣次、原英一、飛鳥亮、茨木憲、こばやし・ひろし等諸氏)訪中。

◎5月 日本映画人代表团(岩崎昶团长、中村登、湊保、井手雅人、大坂志郎、成島東一郎、吉村実子の諸氏)訪中。作家の有吉佐和子氏一行訪中。講談社が、六三年の第一巻、六四年の第二巻につづき、当協会協力の豪華本『中国美術』第三巻を刊行、全三巻完成。

◎6月 中国民族歌舞団(李淦团长)を全国労音と共同招請、日本各地で計四十三回の公演。日本化学工学者代表团(团长、水科篤郎京大大学教授、团员、渡辺伊三郎日本揮発油常務取締役、北脇金治出光興産取締役製造部長、浜井専蔵不二エングニアリング取締役技術部長、俵田三郎宇部興産参与機械営業部長ら諸氏)訪中。

◎7月 日本スポーツ代表团(保坂周助团长、竹腰重丸、山口久太、牧山圭秀ら諸氏)訪中。日本書道家代表团(西川寧团长、山崎節堂、保多孝三、森田緑山、天石東村、徳野大空の諸氏)訪中。日本卓球選手団(四十栄伊久治監督)訪中。

◎9月 「中国二千年の美」展(主催、日中文化交流協会と毎日新聞社)を東京・銀座松屋で開催。関西文化界代表团(塚本善隆团长、榎茂都陸平副团长、白土吾夫秘書長、小合友之助、菊原初子、森田翠香、太田英蔵、辻晋六、岡本庄三、小西輝夫の諸氏)訪中。バレエの大松博文氏訪中。

◎10月 中国体育代表团(張聯華团长、朱德宝、牟作雲、唐家璇の諸氏ら)来日。画家の青木大乗氏訪中。国際情報社「これが新しい世界だ」取材班(徳永栄一氏ら)訪中。NHK「中国文明の伝統」取材班(香川宏、田川純三両氏ら)訪中。中国舞踊家代表团(陳錦清团长)招請。書道家の村上三島氏夫妻訪中。

◎11月 中島健蔵理事長・京子夫人、白土吾夫事務局長・英子夫人訪中、毛

郎团长、白土吾夫秘書長、戸板康二、成井市郎、北村和夫、関口潤、阪口美奈子の諸氏)訪中。日本工芸美術家代表团(松田権六团长、加藤土師萌、北川桃雄ら諸氏)訪中。



老舎氏(左)と歓談する(右から)丹羽文雄、広津和郎、中村光夫の諸氏。当協会、日本文芸家協会、A・A作家会議日本協議会主催の歓迎レセプションにて

—1965年3月27日 東京

中島健蔵氏撮影



初めての中国舞踊家代表団を招請 日本舞踊協会設立10周年を記念して来日した同代表団は、日本の伝統舞踊を鑑賞し交流を深めた。歓迎する中島健蔵理事長(右一)、(左へ)崔泰山、陳錦清団長、汪曙雲、宋彬の諸氏

—1965年11月4日 東京



「東洋の魔女」を育てた大松博文氏が、周恩来総理の要請により中国を訪問し、北京などでバレーボール選手のコーチを務めた羽田空港を出発する大松監督と美智代夫人。大松氏は「日本の一部に中国が強くなれば困るという人もいる。私はこんな意見には耳をかさない。友好が深まることが大切」と述べている

—1965年4月15日 東京



1957年の第一回日本映画代表团から八年を経て、第二回目の代表团が中国を訪問 郭沫若氏(前列右三)と会見した(左へ)岩崎昶団長、中村登、成島東一郎、(前列右より)井手雅人、吉村実子、(後列右より)湊保、大坂志郎の諸氏。(大坂氏より左へ)蔡楚生中国電影工作者協会主席、林林、袁文殊、洪林の諸氏

—1965年5月 北京



関西文化界代表团が訪中 関西文化芸術界を代表する人士によって構成された代表团の訪中は当時大きな注目を集めた。郭沫若氏(前列左五)と会見する(前列左から)岡本庄三、森田翠香、于立群郭沫若夫人、塚本善隆団長(京都国立博物館館長)、(一人おいて)榎茂都陸平、西園寺公一(同席)、菊原初子、西園寺雪江(同席)、(中列左から)小西輝夫、辻晋六、小谷友之助、白土吾夫、太田英蔵の諸氏

—1965年9月19日 北京

戦い、犠牲をおそれず、疲労をおそれず、連続的に戦う」という先人の言葉を、事務局で幾度唱えたことか。文革は翌一九六六年から始まるのであるが、その前兆は十分に感じ取られ、些か通俗的に表現すれば、文化交流やれるうちに質的にも量的にも徹底的にやろうという雰囲気年であった。

(九十九)

一九五六年の創立以来、協会は多忙の連続であり、日中文化交流を阻害するものとの戦いの連続であった。とにかく時の政府が中華人民共和国を認めない、認めないどころか敵視する、という現実に対して文化交流を全面的に推進しようというのであるから、多忙と緊張が連続するのは当然である。「勇敢に

訪中。
◎12月 日本写真家代表团(木村伊兵衛団長、永田一脩、伊藤逸平、永井嘉一、丹野章、目島計一、滝沢直子の諸氏) 訪中。日本美術家代表团(鶴田吾郎団長、森芳雄、中谷泰、西常雄、箕田源三郎の諸氏) 訪中。

沢東主席、周恩来首相と会見、「日中两国人民間の文化交流に関する共同声明」に調印。中国音楽家代表团(李煥之団長) 来日。日本バレーボール選手団(前田豊団長ら) 訪中。